

京都大学言語学懇話会

2001年度活動報告

第55回例会

2001年4月14日（土）

午後1:30～4:45

京大会館102号室

研究発表

「チュクチ語の語形成と名詞抱合」

呉人 徳司（東京外国語大学）

「「今」の対応物を同定する「今ごろ」について」

田窪 行則（京都大学）

第56回例会

2001年7月14日（土）

午後1:30～4:45

京大会館102号室

研究発表

「海岸ツィムシアン語形態論における諸問題から

— 名詞と動詞の区別について — 」

笹間 史子（大阪学院大学）

「中国語と日本語におけるアスペクトの一致関係

（A Comparative Study of Aspect Agreement in Chinese and Japanese）」

沈 力（同志社大学）

第57回例会

2001年12月15日（土）

午後1:30～4:45

京大会館211号室

研究発表

「京言葉について」

堀井 令以知（関西外国語大学）

「使役動詞文と他動詞文」

早津 恵美子（東京外国語大学）

「今」の対応物を同定する「今ごろ」について

田窪行則

本発表では、発話時を表す「今」とさまざまな領域においてその対応物を同定する「今ごろ」の解釈方略の違いを考察し、それにより推論や条件文における領域の存在を示し、その性質を考察した。

まず「明日の今ごろ」、「来年の今ごろ」のような相対的時間名詞と共に用いられる用法を観察し、「今ごろ」の解釈には「今」が設定する発話時を時間スケールで評価して、その時間的性質を抽出する過程を必要とすることを見た。抽出された時間的性質は、「日」や「年」などの同じスケール構造を持つ領域においては同じ値を示す。したがって、たとえば、「明日の今ごろ」と「来年の今ごろ」は、「今日」、「今年」において発話時がとるスケール位置のそれぞれ「明日」「来年」における対応物を指定することができることを示した。

さらに、モーダルの助動詞「だろう」「かもしれない」のように「話し手の現実」と離れた領域の設定を必要とする場合や、「条件的仮想」のような現実と異なる領域の設定を必要とする場合にも「今ごろ」が用いられることから、これらの場合にも「今」が評価される時間スケールが関わっているという提案をした。この提案によりモーダルを含む文における「今ごろ」と「今」のニュアンスの違い、譲歩文の後件に「今ごろ」が使いにくいことを説明した。

以上の考察より「今」と「今ごろ」の違いとして次の点が挙げることができた。「今」は、発話時を表す変数であるが、Kaplan (1978) の意味での固定指示詞であり、特定の発話場面ではどの世界、解釈領域でも同じものを指す。これに対し、「今ごろ」は「今」の特定の発話場面での値からその解釈が構成されるという意味ではダイクティックな要素を表すが、用法としては関数的、役割的であり、領域によって取り得る値が異なる。つまり、「今ごろ」は確定記述的であるといえる。

なお本発表内容は田窪行則・笹栗淳子(2001)として刊行されているので参照されたい。

参考文献

Kaplan, D. 1978 'Dthat', *Syntax and Semantics*, vol. 9: *Pragmatics*. 221-243. Academic Press.

田窪行則・笹栗淳子 2001「「今」の対応物を同定する「今ごろ」について」 南雅彦・アラム佐々木幸子 編 『言語学と日本語教育Ⅱ』39-55, くろしお出版。

(たくぼ ゆきのり)

海岸ツィムシアン語形態論における諸問題から

— 名詞と動詞の区別について —

笹間 史子

海岸ツィムシアン語は、カナダ北西部およびアラスカ南東端で話される言語で、系統的には、ツィムシアン語族に属する。

海岸ツィムシアン語では、これまで語類の問題がほとんど取り上げられず、伝統的に数詞以外の屈折する語は名詞、自動詞（形容詞的なものを含む）、他動詞の三つに分けられてきた。しかし実際は、必要とする項の数や屈折接尾辞の形などにより、名詞と自動詞を他動詞から区別することは容易であるが、名詞と自動詞の区別は容易ではない。

海岸ツィムシアン語における名詞と自動詞の区別が困難な理由としては、名詞、自動詞ともに述語としても項としても（名詞はコピュラを必要とせずに）用いられること、名詞述語の主語が自動詞述語の主語と同様にマークされること、そして自動詞は名詞化接辞等の形態的手段を必要とせずに、そのまま項として用いられ、その際、項として用いられる自動詞の主語は、述語として用いられる場合の主語と異なり、所有接尾辞によってマークされることがあげられる。

これらの理由により、名詞と自動詞という二つの語類を明確に区別するのは困難である。しかしながら、屈折する語のうち、数詞と他動詞を除くすべてが一樣なふるまいをするわけではない。以下にあげる手がかりをもとに、名詞（的なもの）と自動詞（的なもの）を（ほぼ）分けることは可能である。

- ① 接辞付与により項を増やすか否か： 項を増やすことのできるタイプの接辞には、sv- 'make', tv- 'with', -n (causative) などがあるが、これらがつくことにより、結びつく項の数を1から2に増やすか否か。
- ② アスペクト表示： アスペクト（継続性 'always, still, keep ...ing'）を表すCV-重複と共起するか否か。
- ③ 他の屈折する語により修飾されるか否か、また他の屈折する語を修飾するか否か： 他から修飾はされるが自らは他を修飾しないものと、他を修飾はするが自らは修飾されないものとの二つのグループにほぼ分けられる。

①で接辞の付与により項を増やさなかったグループは、②でアスペクト重複をとらなかったグループ、そして③で他に修飾されるが他を修飾しなかったグループとほぼ一致する。また、①で接辞の付与により項を増やしたグループは、②でアスペクト重複をとったグループ、③で他を修飾はしたが他から修飾されなかったグループとほぼ一致する。前者を「名詞」、後者を「自動詞」としてこれらを区別してよいのではないかと考える。

（ささま ふみこ）

A Comparative Study of Aspect Agreement in Chinese and Japanese

Li Shen

In the presentation I distinguish two types of sentence final particles (SFPs) and two types of predicates in Chinese in terms of the aspectual features [$\pm$ dynamic]. I assume that aspect in Chinese projects a maximal projection, AspectP, which determines the temporal properties of predicates. It is argued that the predicates and the SFPs in Chinese sentences must agree in the [$\pm$ dynamic] features in syntax. It is also argued that Chinese has two light verbs: the static light verb *slv* and the dynamic light verb *dlv*. These two light verbs, in conjunction with the lexical verbs, determine the event structures of the predicates in Chinese, and furthermore serve as the basis for the syntactic agreement of the aspectuality between the SFPs and the predicates. In the presentation I also compare the SFPs and predicates in Chinese and Japanese. Based on empirical evidence, I propose that Japanese lacks syntactic aspect agreement, in sharp contrast with the case of Chinese.

(沈 力)

京言葉について

堀井令以知

京言葉の話される地域は、ほぼ、地名に「上ル・下ル・西入ル・東入ル」がつく範囲、行政区で言えば昭和4年以前の旧上京区と旧下京区にあたります。京言葉を代表するのは、御所の言葉と祇園の言葉でしょう。

京言葉の特色とは何か。NHKの調べた「残しておきたい京言葉・ベストテン」アンケート（監修：堀井）では以下のような語が選ばれております。

10位： はんなり

花（華）ナリ、から転じたもの。「はんなりしたエゝ帯どすなァ」あるいは、片付いたのを見て「はんなりしたなァ」などのようにも用います。

9位： おたのもうします

舞子言葉で必修の3つのうちの一つですね。あとは「ヘエ、おゝきに」と「すんまへん」です。

8位： おきばりやす

7位： はばかりさん

「ご苦労様でした」という意味です。

6位： かにんえ

女性の方がよく使います。

5位： ほっこり（ほっくり）

4位： よろしお上がり（やす）

ごはんの時にこう申します。ちなみに「いただきます」「ごちそうさま」というのは町方（庶民）の言葉で、御所では使いません。御所では食事の前も後も「ありがとう」です。これを「ありがとうございます」と言ってしまうと野暮ったいとされ、目上に対しても「ありがとう」でよいとのこと。

3位： おはようおかえり（やす）

「いってきます」と出かける人に言います。祇園界限では使いません、「早う帰られたら商売上がった」ですから、単に「行っといなはれ」です。

2位： おいでやす／おこしやす

祇園界限では「おこしやす」と教えますが、旅館などでは「おいでやす」と言われることが多いようです。「お～やす」という形式は江戸前期までは遊女言葉でしたが、今では意識することなく皆使っております。

1位： 「おおきに」

「おおきにありがとう」の 'very much' だけが残った形です。御所では使いません、先述しましたように、「ありがとう」です。

（ほりい れいいち）

使役動詞文と他動詞文

早津恵美子

日本語において使役と他動との連続性・類似性はいろいろな事象にうかがうことができる。本発表では、そのひとつとして、使役動詞(「V-(サ)セル」)を用いても元の動詞(「V」)を用いてもほぼ同じ事態が表現できる現象があることをとりあげ、どのような条件のもとにそれが生じるのかを考えてみた。

次の例(1)では「作らせる」が、(2)では「作る」が、同じような事態を表現する類似の文構造の中で用いられている。両者をいれかえても不自然でない。

(1) ソファの上には、三越へ頼んで大急ぎで作らせた着物と丸帯とが、包みを解かれて長々と並べてあります。『痴人の愛』

(2) その眺望の好い、静かな一区域は、父母の眠っている場所だ。幸作に頼んで作った新しい墓石は墳の前に建ててあった。『家』

こういった現象が生じるのには、次にあげることを初めとしていくつかの意味的・構文的・語彙的な条件が複合的にかかわっている。

事態の意味的な性質:

主者が他者に依頼したり指図したりあるいは他者を利用したりして、大規模な事業や専門的な作業などを実現にみちびき、実現された結果を主者がみずからのものとして享受するような事態であることが必要条件である。使役文のうち、他者利用性・事態享受性の低いもの(「子供をおだてて勉強させる」)の場合はその「V-(サ)セル」を「V」で言い換えることはできない。

文構造の性質:

主者が他者を利用していることが文構造としてよく表れている文、つまり、従属節動詞が主者による他者利用を伺わせるような動詞のテ形である次のような構文のときに生じやすい。「Xが Yを/に V₁-シテ V₂-(サ)セル」

(「頼んで、命じて、誂えて、派遣して、動員して、(人)使って、(人)通して」)

動詞の語彙的な意味:

その動詞が、手間のかかる物の生産や取り壊し(「(城を)つくる、(家を)建てる、(運河を)掘る、(振袖を)こしらえる、(ビルを)解体する」)、物の大掛かりな移動(「(建物を)移す、(資材を)運ぶ、(農家を)移築する」)、大規模な調査や準備(「(素性を)調べる、(会議の準備を)進める、(工事を)始める」)、意志的に行う再帰的な動作(「(髪を)結う、(髭を)剃る、(見合い写真を)とる」)などを表わす動詞であるときに生じやすい。これらは、人や事物に新しい状況をもたらす動きである。

ただ、こういった条件が整っているにもかかわらず「V-(サ)セル」文と「V」文との類似が生じないこともあり、さらに考察が必要である。

(はやつ えみこ)